

兪吉濬の日本留学に関する一考察

—朝鮮開化派と福沢諭吉の関係を中心として—

李 垠 松

はじめに

本稿は、1881年から1882年にかけて慶応義塾で学んだ兪吉濬(ユ キルチュン、1856—1914)の日本留学の意味を、朝鮮開化派と福沢諭吉の関係から再検討することによって、それを彼の啓蒙教育思想の形成において位置づけようとするものである。

当時の朝鮮は1860年代から西力東漸の波が押し寄せ、外国商船の通商要求や欧米と日本の開港要求が脅威的なものになっていた。それに対し朝鮮の知識人と国民の間には危機意識が形成されながらも、一方では積極的に洋学を学んでとり入れようとする開化思想が形成された⁽¹⁾。この開化思想は1881年からは朝鮮政府によって採り入れられ、1884年甲申政変が失敗に終わるまで国家政策の原理として支持された。そのような動向のなかにおいて、短い期間ではあったが、開化政策の中心的役割を果たしたのは初期開化派であった⁽²⁾。彼らは福沢諭吉(1834—1901)と非常に深い関わりを持ち、独立や啓蒙、さらに富国強兵という観点から日本型の文明開化を学ぼうとしたのであるのだが、兪吉濬の留学もそうした動向のなかにあった。

ところで、教育史における兪吉濬の開化思想は、韓国の近代啓蒙主義教育をはじめて構築したものとして捉える必要があるが、そのような兪吉濬の教育思想を正確に理解するためには福沢諭吉との関連及び思想的な影響、さらに両者の思想的異同等を明らかにしなければならない。なぜならば、その検討を抜きにして、明確な韓国の近代啓蒙教育史は始まらないからである⁽³⁾。事実、兪吉濬の研究において、福沢との思想的関係に触れる研究がみられるものの、兪吉濬の日本留学を福沢との関係において焦点をあてた本格的な研究はほぼ無いに近い⁽⁴⁾。

韓国における兪吉濬研究は新たな成果がみられる状況であるが、兪吉濬研究は、まず、開化派に対する評価及び対日本観に関する見方が様々であることから、彼の近代啓蒙主義教育に対する研究はいまだに十分に

為されていないといえる。そのような先行研究の動向を次の節で検討するのだが、そこでは、彼が留学する前後における朝鮮開化派と福沢諭吉との関係を明らかにする上で、兪吉濬の日本留学というものが彼の啓蒙教育思想と実践の面において如何なる媒介項として役割を果たしていたのかを検討する。

I. 先行研究の検討と研究の範囲

韓国における兪吉濬研究は多様な観点から行われてきたが、そこでの兪吉濬をめぐる評価は次の三点 1) 漸進的改革家、2) プルジョア啓蒙思想家、3) プルジョア的変革志向の時務改革家、に立っている⁽⁵⁾。1) の観点は、兪吉濬は甲申政変の段階で金玉均などの急進開化派と改革に対する認識自体は共にするが、政変の失敗以後、体制内において漸進的改革を計る方向に修正したという立場から捉えられたものであって、ここでは「漸進的改革家」、「保守的現実主義者としての過渡期的改革官僚」、「穏健開化派」あるいは「東道西器論者」などと指摘される⁽⁶⁾。2) の「プルジョア啓蒙思想家」という見方は主に兪吉濬の政治思想や法思想などに注目し、彼の思想を啓蒙運動の起点として把握する立場である⁽⁷⁾。「プルジョア的変革志向の時務改革家」という3) の評価は一般的ではないが、19世紀朝鮮の歴史的条件の上で、開化を主張した時務論者の「時務」という概念に着目し、限界こそ指摘されながらもプルジョア的変革志向をもつ先進的改革勢力の一翼を担ったとして高く評価する立場である⁽⁸⁾。2) と3) の立場からはプルジョア的限界として兪吉濬の非民衆的「民」観が批判される。一方、最近の研究ではそのような兪吉濬の思想の複合性あるいは両面性を「近代化＝西欧化ではなく、伝統と近代、東道と西道の長所—儒教の倫理道徳と西欧の近代的法と制度—を複合的に活用する事によって主体的近代化を求めた」と評価する見方もみられる⁽⁹⁾。他に、日本における兪吉濬研究も少なくはない。特に、大国主義から小国主義への

転回を提議した趙景達の研究は注目される⁽¹⁰⁾。

しかしながら、韓国の兪吉濬研究が明確な兪吉濬像を造れなかったのは、二つの理由がある。一つは彼の改革が漸進主義であった特質にある。彼の漸進的改革の標榜が改革への実践のための選択であったのか、それとも、たんなる保守的現実主義的な官僚としての立場を明らかにしたものかに対しては依然疑問の余地がある。兪吉濬は、甲申政変の当時、アメリカに留学中だったので政変に参加できず、帰国後7年間の軟禁生活を送りながら「西遊見聞」など、彼なりの改革に対する意見や写真を含めた著作を残している。「西遊見聞」から見える「得中」の考え方もやはり漸進的改革のことを意識したものであろう。しかし、兪吉濬は既に甲申政変の失敗の後、「西遊見聞」を書き、金玉均などの甲申改革派に対する批判を高めながら、自分なりの改革の内容や改革案を提示している。にもかかわらず、彼が構想している開化論は福沢の文明論に共通するところがあり、また、金玉均らの改革案とも共通点が見える。それであるが故に、彼の「得中」の開化論とは一体何かを解明するのに困難している。

また、兪吉濬の日本観も兪吉濬研究の困難の一つである。韓末自強運動を起こした勢力には「先実力養成後独立」という立場の上で社会進化論や文明開化論を展開し、日本を中心とする日清韓三国の連帯論を基本的に受け入れようとした知識人が多かったのが現状であった。⁽¹¹⁾兪吉濬もその一人であったと見られるが、次の文章からそうした彼の状況がみえる。

遠くある列強の救援を頼って、近くある隣国を蔑視してはその国が亡びるのであります。亡びるとは、必ずしも亡びを謂うことではありませんけれど、しかしながらその甚だしく危ういことを言って、或いは亡びに至ることもあります。またヨーロッパの人々が言うことを察してみるに、国たるものを云うにあたっては自らを知ることが大事だということであります。自らを知るといふことはその国の置かれている所や状況、またそれと隣国との関係について知ることだと言ふことでもあります。臣がこの二説を得てから、三十年間これを決して忘れた日はありませんでした⁽¹²⁾。

1907年書かれたこの「光復策」では対日平和信頼関係を前提に日本の指導に従うと韓国も文明国になって、後は日本に奪われた外交権を取り戻すことができると述べている⁽¹³⁾。そのような彼の日清韓三国の連帯論や「先実力養成後独立」論は既存の研究において社会進

化論に対する批判を含め、その甘い国際観や親日性等が批判されてきた。厳しい植民地統治を経験した世代の研究者であれば、兪吉濬の対日観を帝国主義に対する抵抗意識が希薄なものとして見なすのも無理ではなからう。しかし、最近の研究では兪吉濬の日本観に対する先入観や結果論的な分析をさしあたり止揚し、彼の思想のありのままの実体を捉えようとする傾向も出てくる。すなわち、「当時の日本は、今の我々の観点からは帝国主義者に見えるが、当時の政治家には日本はジレンマではなかったのか。改革のモデルおよび支援国としての日本と西欧のような帝国主義の侵略者として日本という二重認識のジレンマを持ちながらも、甲午改革のとき開化派に日本は開化の支援勢力として捉えられたのではなからうか。」という見方である⁽¹⁴⁾。兪吉濬は「光復策」に書かれたように30年間、日本の協力を得て韓国の文明化を進めようとした考え方に変わりはなかったようである。また、彼が実践しようとした啓蒙教育運動と國家独立の構想の枠組みは内政改革から國民啓蒙教育へ重点が変わったものの、甲申・甲午改革時期の枠組みとの連続性はみられる。

ところが、そのように、兪吉濬を支えてきた「朝鮮の独立を計る文明化・國民啓蒙」の「夢」ともいべき計画が、その基礎を固めた契機は一体何であろうか。それは彼の日本留学ではなからうか。「日清韓三国の連帯論」は兪吉濬だけでなく初期開化派の人物であれば、みなが持っていた構想であって、兪吉濬が日本に留学した時期、すでに福沢が捉えていた対外論でもあった⁽¹⁵⁾。福沢は、韓国の一般的福沢観からすれば、「朝鮮経営」を図るため、民間次元で日本政府を支援した帝国主義者としてよく知られている。しかし、兪吉濬が留学した前後の朝鮮開化派と福沢との関係は確かに政策的に利用しあっていた点が認められはするが、しかしそれよりは深い信頼関係があったのも一つの事実として注目する必要があると思う。⁽¹⁶⁾

一方、教育史研究分野における先行研究は「西遊見聞」を用いる研究は多いが、兪吉濬自体をテーマとして取り上げた研究は少ない⁽¹⁷⁾。私は兪吉濬の教育改革論を「先教育後改革」という枠から西欧の科学と儒学の実学的学問の精神を同一化させ、洋学の受容論理を組み立てて西欧の科学の必要性を強調し、また、儒教を宗教的ではなく一つの学問として考える点から「伝統教育と西欧教育を矛盾せず共存させた」と評価した⁽¹⁸⁾。しかし、洋学の受容論理を組み立てるため「北学」的考え方を中心に考察するにつれて、兪吉濬の教育論の啓蒙的性格に対する分析が抜けてしまい、その

研究からは、結局そうした調和的姿勢からみれば「不徹底的な近代認識に起因するのではないか」という疑問が残ったのである。従って、これからの研究においては、以前の研究とは逆の方向に向けて、兪吉濬の教育思想や実践を把握したい。すなわち、彼が徹底的な近代認識の上で当時の朝鮮に合わせて構築させた啓蒙教育思想と実践が重要であるという立場に立って、その究明に取り組んでいきたい。初期開化派一特に、甲申改革勢力一と福沢との関係の中での兪吉濬の位置、また、兪吉濬と福沢との関連及び思想的な影響、両者の異なる考え方を解明することによって、兪吉濬の啓蒙運動の実体はより明らかになると思われる。従って、兪吉濬の啓蒙教育思想や実践に対する研究を行うことにあたって、まず、本稿では、福沢諭吉との関連を特に、留学期間に注目し、人間関係、学問的影響などを中心として検討して行きたい。また、次の節では、当時の初期開化派の日本観や福沢との関係を中心に考察したいと思う。

II. 朝鮮開化派の日本活動と兪吉濬の留学

兪吉濬は1856年（安政3年）10月24日ソウルで生まれた。兪吉濬は当初、祖父李景植から漢学を修学して科挙準備のため伝統的学問に没頭した。しかし18歳の頃、朴珪寿との出会いを契機にして、伝統学問への道をあきらめて時務経世学に自分の進路をかえることになる⁽¹⁹⁾。当時の朴珪寿は祖父（朴趾源）から受けついで「北学」的実学思想⁽²⁰⁾の影響により開国、開化思想に転換していたが⁽²¹⁾、彼の開化論はむしろ開国論により近いものであろう。当時この朴珪寿の影響を受けた人物の中には、金玉均や朴泳孝、金允植、魚允中などがあり、ここに兪吉濬も加えることになる。

兪吉濬は朴珪寿の塾で、多元的な世界認識を受け入れることになる。『矩堂詩鈔』の序文では兪吉濬と朴珪寿との出会いがこのように描写されている。

矩堂は幼いときから俊才であった。また俗な言葉をみだりに口にすることはなかった。早くも朴珪寿先生は少年のときの彼の詩を見て将来国のため大きな人材になると感歎した。また彼を呼んで魏源が書いた『海国図誌』を与えて読むことをすすめ、これからは海外知識を知らなければならぬと励ました⁽²²⁾。

朴珪寿はまず開化派の人士たちに伝統的な小中華の意識から抜け出した多元的な世界認識を教えた。この思想は既存の文化自尊意識を反省し、自己の文化を相

対化することからはじまるものであった。朴珪寿が弟の朴宣寿に送った書翰から彼の多元的な世界認識の一端をうかがうことができる。

わが国をさして礼義之邦というのだが、わたしは本来この言葉をのぞましく思わない。天下万古に国家になって礼義のない国がありうるか。これは中国人の立場から夷狄の中にほめるべき者がいればこれを称讃して礼義之邦といったことにすぎない。従ってこれはむしろ必ずむべきことであり、みずから天下に豪言するほどではないのである⁽²³⁾。

朴珪寿のいうところは、礼義というのは先天的に朝鮮のみが持っているのではなく、万国が保有しているものである。よって、「洋夷」にも礼があるという論理であった。これは、従来の華夷観の転換を意味する考え方である。つまり、朴珪寿の開国論は外国（洋夷）との通交の論理に基づいていることであった。特に、彼は日本が西洋と同様に力で開国をせまることを知っていながら、敵を一つ増やすことは過ちだと主張して、日本との通交を勧めた⁽²⁴⁾。

兪吉濬が朴珪寿から直接教えをうけたのは短い期間であったが、彼は朴珪寿の影響を一番強く受けた金允植と金弘集などはもちろん金玉均とも交際を続け、通商開国による開化に対する意識を高めた。そのように、朴珪寿の時務経世塾は通商開国論を生み出して、「中国との朝貢体制から万国公法による条約にもとづく国際関係への適応と生き残り」の問題を最大の課題として新知識を学ぶ塾であった。

朴珪寿が1877年2月亡くなってから、その指導を受けた金玉均をはじめ朴泳孝、徐光範、兪吉濬など、開化派の人物たちは、中国からの新書や日本からの洋学書を読む読書会を続けた。徐載弼は『自叙伝』で、金玉均などとともに新寺（現在のソウル奉園寺）で行われた日本の書籍を読む会を次のように語った。

ある年の春、金玉均が人々を連れて新寺に行って、ある学識のある僧侶の瑤池鏡を通して世界都会地や軍人の姿が映っている写真と「万国史記」をみた。その時、金玉均がその僧侶に頼んで、二ヶ月後、約束の通り本や写真、マッチなどを持ってきた。1年以上をかけてその本を全部読んだのである。当時にはそのような本を読んでいることが露見されると「邪学」と言われ、重罰が当たるので、一つの場所で長く読むことができず場所をかえながら、世界歴史、地理、物理、化

学などの内容の本を読んだ⁽²⁵⁾。

徐載弼はその本を全部読んだ後に、わが国においても他の国のように人民の権利を立てようとして開化派になったと語っている。そのような金玉均を中心とする開化派の結集の端緒は1879年李東仁の日本密派からもわかる⁽²⁶⁾。一方、次のような朴永孝の回想からは開港以後の説書会の特徴を把握することができる。

その時、政治事情はだれもが憤慨すべきものであった。国事が滅茶苦茶で、売官売爵のようなことは通常あることで、言うまでもないし、国税を徴収してはすべて坤殿(明星皇后)の収税官たちの私腹に入るのである。これをみてどうやって憤慨しないことがある。家で集まるのが難しいときはタブコル僧房と奉湊寺で頻りに集まった⁽²⁷⁾。

当時、読まれた本の具体的なタイトルなどは残っていないが、歴史、地理、物理、化学などの日本の書籍だったようである。既に、開港後には、『万国公法』や『易言』などが中国から入って広がっていたし、修信使(朝鮮の訪日使臣)の日本随行以後からは黄遵憲の『朝鮮策略』がたくさん読まれた。他には自然科学の書籍も相当流行っていた⁽²⁸⁾。すなわち、この時期読まれた知識は西洋文物の摂取と国の富強に関するものといえるだろう。彼ら開化派における「清との朝貢体制から条約による国際関係への適応と生き残りの問題(通商開国論)」は、李東仁の日本往来や日本の書籍を通して新たな局面を迎えた。

金玉均ら初期開化派は、1884年の甲申政変まで福沢諭吉と非常に深く関わって、日本型の文明開化を通して独立や啓蒙、富国強兵を目指して内政改革を図ろうとしたのはよく知られている。「福沢諭吉が朝鮮の金玉均らの開化派勢力を育成した」という見解は井上角五郎の「福沢先生の朝鮮経営と現代朝鮮の文化とについて」以来、日本では定説のようであったが、最近の研究では「金玉均を中心とする自主的開化派勢力の形成と福沢の支援」が把握されている⁽²⁹⁾。

韓国の資料では、兪吉濬は紳士遊覧団の魚允中の随員として派遣され、慶應義塾に入学することになっているが⁽³⁰⁾、『福沢諭吉伝』には金玉均らの開化派との出会いと兪吉濬の入学の模様が次のように述べられている。

(金から日本行を囑された李東仁は)朝鮮に在る我

東本願寺の僧侶に交はり其紹介を得て京都の本山に至り、当時先生の家に居た寺田福壽(東本願寺派の僧侶)に依つて先生に面会し、日本名を朝野某と称して、しばし先生の門に出入りしてゐた。(中略)金は李東仁により先生の意見を知つてます。欽慕の念を増し、彼の朴定陽等の一行をして先生を訪問せしめ、又俊秀の青年を選抜して日本に留学せしむることとし、兪吉濬、柳定秀の二人は慶應義塾に来学した⁽³¹⁾。

このように日本の資料では『福沢諭吉伝』だけではなく『慶應義塾五十年史』にも「朝鮮人の入塾」における金玉均の役割が紹介されている⁽³²⁾。また、当時の新聞でも金玉均からの日本行を囑された李東仁のことや開化党の首領としての金玉均の役割が紹介されている。1881年(明治十四年)4月27日の朝野新聞では「朝鮮開化党の日本渡来阻止さる一守旧党の強訴で」というタイトルで日本派遊の紳士一行の朝鮮での出発前の様子を伝えているが、そこに金玉均と李東仁の名前が見える。金玉均は紳士遊覧団としては来日できなかったが、最後まで、出発港である東萊府にて紳士一行と一緒にいた様子がかがえる⁽³³⁾。

紳士一行は五月二五日に東京に到着しているが、兪吉濬は六月九日に入学した。詳しい事情は残っていないが、兪吉濬の留学は事前に計画されたものと考えられる。すなわち、兪吉濬の日本留学は、まだ日清の朝鮮をめぐる対立に初期開化派が巻き込まれる前の、金玉均と魚允中が開化をともに進める時期において、彼らが福沢の支援を得る最初の日本での活動の成果であろう。

III. 兪吉濬の留学生活と福沢諭吉

福沢にとって、朝鮮の開化派の人物たちは確かに興味深い存在であったようだ。福沢が1881年(明治14年)六月、ロンドンに滞在中の小泉信吉、日原昌造の二人に贈った書翰に次のような一節がある。

本月初旬朝鮮人数名日本の事情視察の為渡来、其中壯年二名本塾に入社いたし、二名其先づ拙宅にさし置、やさしく誘導致し遷居候。誠に二十餘年前自分の事を思へば同情相憐むの念なきを得ず。朝鮮人が外国留学の頭初、本塾も亦外人を入れるの発端、實に奇偶と可申。右を御縁として朝鮮人は貴賤となく毎度拙宅へ来訪、其咄を聞けば、他なし、三十年前の日本なり⁽³⁴⁾。

また、福沢が当時朝鮮の使節を見て、詠んだ次の詩

から彼の思い出が感じられる。

朝鮮使節渡来

異客相逢君莫驚 今吾自笑故吾情
西遊記得廿年夢 帶劍橫行龍動城(同上)

「廿年」前の事とは1863年(文久2年)のヨーロッパ行の時をいう。福沢は朝鮮の開化がまことに望ましいことだと思ったのに間違いない。もちろん、丸山の言うように西洋に対する壁を作るための理由もあっただろうが、それよりも、福沢は朝鮮が日本の成功を学ぼうとする国として現れたこと自体を、彼自身が尽くしてきた文明開化の成果として捉えようとしたのではないかと思う。福沢は金玉均がはじめて日本に来た時、寺田福壽を京都まで迎えにやるほど、積極的な関心を表明した⁽³⁵⁾。

その1年前、紳士遊覧団として来日し、慶応義塾に入学した兪吉濬に対して、福沢本人も深い興味を示したが、当時の「郵便報知新聞」の6月10日の記事にも「朝鮮の二秀才慶應義塾へ入学」を次のように紹介している。

頃日渡航せる朝鮮人兪吉濬(二十五年)柳定秀(二十六年)の二名は、非常の奮発にて一昨日三田の慶應義塾へ入塾せり、同人等は彼国の士族にて非役の少年生なるが、本国にても文才の聞えあるものなるが、日本人に接するは釜山を発し今日まで僅か三十余日の間に早くも日本語を聞き覚え、寒暄一通りの挨拶ぐらゐは出来るといふ、同人等は先づ日本語を傳習し、翻訳書を読み得て後に洋書を講究する見込みにて、只管修業に熱心してをる由、是まで同塾へ日本婦人に出来たる外国人の子は沢山に入塾せしが、純粹の外国人が入塾せしは此兩名が嚆矢なりと⁽³⁶⁾。

兪吉濬らの留学は非常に注目を浴びたようで、記事の「是まで同塾へ日本婦人に出来たる外国人の子は沢山に入塾せしが、純粹の外国人が入塾せしは此兩名が嚆矢なり」とのところには強調の傍点が付けられている。

他に、兪吉濬が慶應義塾に入学してからの様子は鎌田榮吉の「義塾と朝鮮との関係」という演説内容からうかがうことができる。

私の記憶ではたしか明治十二年の秋と思います。朝鮮人の兪吉濬、尹致昊の二人が、義塾へやって来まし

た。兪氏は慶應義塾へ入り、尹氏は中村敬宇先生の塾同人社に行って学びました。所がその最初来ました時は、余程奇異に感ずる事が沢山ありまして、今まで朝鮮人は絵で見て居りましたが、実際を見たのはこれが初めてでありました。此二人は福沢先生の宅へ来まして、私もそこで話をし、物を食ったりしました。その時、今記憶して居りますのは、論語を出して読ませてみましたが、音読では真直ぐに行く、それから朝鮮の言葉で訳をつけさせますと、日本と同じ事で返つては読んでおります。その読んでいく言葉は固より判りませんが、引繰り返って行く所は、日本の読み方と違ひはない、日本と同じ語脈を伝へて居る言葉に違ひないと云う事は判りました。つまりお前の国と日本とは同じ語脈である兄弟の国であると云ふやうなことを言つて話しましたが、その時傍らに間野と云う漢学者が居りまして、「支那人でもやはり真直ぐに行つて意味を取る時は引っくり返へるのだから」と云ひましたので、漢学者はさういふ馬鹿なことを云ふから困ると云つて福沢先生から叱られました。兎に角此の間野遺棄は筆談で以て、二人の朝鮮人の監督を致して同居しました。(中略) 其の二人に間野君が洋燈の石油が無くなりました時に、書生だから油などは自分で行って買って来いと申しますと、どうしても買ひに行きませんぬ。苟くも両班の身分を持つものは、町へ買ひ物に行くことが出来ないと云ふのです。つまり日本でいへば、その癖途中を歩いて居りながら、果物店で柿などを買って噛みながら歩きます。さういふことは一向構わぬので、この辺は前後撞着だと云ふたのです。それが一番最初でした⁽³⁷⁾。

この内容からは初めて朝鮮人を見る驚異や異文化に対する戸惑いが紹介されているが、とにかく、当時兪吉濬が福沢の元で指導を受けている様子が窺える。まず、「同じ語脈である兄弟の国である」という話や福沢が漢学者を叱つたところから福沢の親朝鮮的な姿勢が判る。また、両班の身分に対する言動は身分的限界を感じさせるのだが、それは、留学にあたる兪吉濬の自己認識が書生でなく政客なのだ、ということをしめしたのではなからうか、と思われるのである。在来の研究からも兪吉濬は政客として振る舞つたと説明されてきた⁽³⁸⁾。政客としての活動には、1882年5月「興亜会」に金玉均と共に出席したことや壬午軍乱が起きた時、尹致昊と共に日本政府に兵を要請することなどに現れている⁽³⁹⁾。一方、滞在期間が経過してからの兪吉濬の様子は「福沢諭吉伝」からうかがえる。

新聞紙の発行は牛場顧問渡韓の際、先生が其実行を期せられた一事項であった。先生は豫てより朝鮮人の教育上その文章を平易ならしむるため、彼の国の諺文即ち仮名文字を漢字と混用使用することに着眼せられ、兪吉濬が三田の邸に寄寓して居たとき、兪に命じて「文字の教」の文章を漢諺混用の仮名交り文に譯せしめ、文章はこれでなければならぬといつてゐられた⁽⁴⁰⁾。

ハングルと漢字を合わせて使う文章作り（以下国漢文混用とする）に関わる福沢の役割はほとんどの兪吉濬研究から評価をうけるものである。とにかく、兪吉濬は1882年12月頃牛場卓藏、井上角五郎、高橋正信の三氏と共に朴泳孝一行と帰国し、韓国最初の近代式外務省である統理交涉通商事務衙門の主事に任命される。が、彼は新聞の発刊にも力を入れて国漢文混用の文書を残している。兪吉濬の帰国は新聞発行を实行しようとした朴泳孝が新聞発行の実務を彼に任せる予定で帰国を進めたという⁽⁴¹⁾。

おわりに

以上、兪吉濬の日本留学は初期開化派の努力と福沢の支援によって実現し、彼は日本語と洋学を学んだものと考えられる。彼は学生でなく政客のような意識が強かったようである。また、彼は、福沢の著作や洋学の内容を、まず日本語で理解してから、それを国漢文混用の訳の作業をしたと考えられる。

このような兪吉濬の日本留学は、彼の教育思想や実践にいかなる位置を占めるのであろうか。彼が30年間、一日も忘れることができなかつたと、「光復策」で書きあらわした「隣国との関係」の二説を得る時期が日本留学の時だと断言こそできないが、それが朴珪寿の時務経世塾の時代に得られたとはいえないし、また、1879年からの日本書籍を通して得たとも捉えにくい点を考えるなら、彼がその説を得た時期を日本留学期間中と考えて無理はないであろう。なぜならば、彼の留学以前、朝鮮で広く読まれた「万国公法」、「易言」、「朝鮮策略」という著作からは開国や近隣国との友好も含まれながら、また欧米との通商やアメリカとの交流を勧める「連米」のことも強調されていたのだが、「光復策」における「隣国との関係」を強調する立場とは異なる思想的動向があったからである。つまり、「遠くある列強に救援を頼って、近くある隣国を蔑視してはその国が亡びるのでありましょう」という説は日清韓三国連帯論と結んで考えられるものであろう。特に、兪吉濬が留学した時期、福沢は金玉均と共に非常に「興亞

や三国連帯を強調したので、1907年の「光復策」で書かれた30年の前の「隣国との関係」の二説を得た時期はやはり彼の日本留学時期だと理解してよいだろう。

結局、兪吉濬は日本留学の際に学んだことを学問の面においても、改革の推進においても一貫性を持って1907年からの啓蒙教育運動まで背負って来たのであろう。確かに、兪吉濬の思想が集大成されたといわれる「西遊見聞」からは「西洋事情」や「学問のすすめ」、「文明論之概略」の影響も読み取れる。

兪吉濬と福沢の関係の本音は、兪吉濬が甲午改革のとき内務大臣に任命された一ヶ月後福沢宛に送った書簡からうかがえる。彼は朝鮮の改革のため借款が日本の国会で許可が得られるよう支援を次のような言葉で福沢に頼んでいる。

先生、持此議賛成之、至如少年、欲取朝鮮之論、已自先月、門生、在日本時、聞於先生者也唯望⁽⁴²⁾。

つまり、福沢が少年のように熱情を持って、朝鮮への借款が国会で許可されるように「朝鮮之論」を『時事新報』の論説として載せてくれることを望んでるのである。実に、福沢はこの書簡が送られた1895年（明治28年）12月28日から25日後、「朝鮮政府に金を貸す可し」というタイトルの論説を『時事新報』に載せている⁽⁴³⁾。他には、E.S.モースに送った手紙からも福沢との私的人間関係が続いているのがうかがえる。アメリカ留学の際、福沢一太郎と捨太郎がE.S.モースの家を訪問した時、深い情を込めた挨拶を伝える内容や、亡命時期にも経済的支援を得ている内容からも福沢との信頼関係は相当なものであったといえる⁽⁴⁴⁾。兪吉濬において、福沢は朝鮮の開化を支援するにあたって、信頼できる人物として認識されたのであろう。

本稿において、兪吉濬と福沢の関係の全体像を十分に描くには至らなかつたが、兪吉濬と福沢の信頼関係が形成されている点を確認することはできた。しかし、その信頼関係が兪吉濬の啓蒙教育思想や実践にいかなる形で繋がったのか、また、教育史においてどのような評価を下すべきかなどはこれからの課題であろう。

註

- (1) 朝鮮の開化思想は1870年代に形成されたという見解が一般的である。開化思想形成時期に関しては1850年代、1860年代、1870年代説が提起されている。李光麟と姜在彦、青木功一らは1870年代とみている。（李光麟「開化党研究」（一潮閣、1993）、李光麟・

- 慎鏞廈『史料から見た韓国文化史』近代篇，(一志社，1993)。
- (2) 本稿における初期開化派は金玉均，兪吉濬，金允植などを含む開化勢力を示す。
- (3) 儒教と近代に対する議論は1960年代の日本の急成長以後，儒教文化が近代社会への転換に寄与したという観点が提供された。また，1980年代には韓国・台湾などの急成長から儒教資本主義という概念とともに，日本では「儒教ルネサンス」，韓国では「儒教美化論」と呼ばれるほど思想界にも近世から近代にかけて儒教の役割を肯定的に評価する研究が見られるようになった。韓国の教育史研究分野においても，1990年代そういう見方に基づいて，伝統教育から近代教育への非連続性を強調してきた既存の観点を植民地美化論の帝国主義論や民族主義的近代化論を批判しながら，伝統教育から近代教育への連続性の解明を目的とする研究が増えてきた。拙稿「初期開化派の近代教育改革論研究」(梨花女子大学校博士学位論文，1998)もその一つである。その論文ではまず，開国の時期，近代的教育改革論を提供した初期開化派が韓国の朱子学の流れから実学の立場，中でも「北学」の基盤においてどのように新しい教育思想や教育体制を理解したのか，また，その基盤がどういう形で残存したのかを分析した。特に，4章2節では福沢諭吉の儒教批判を中心とする文明開化論を検討し，韓国の初期開化派は福沢の徹底的な西欧化と異なって，北学思想の衷心実学的学問観というものを継承し，伝統教育と西欧教育の長所とを調和しようとしたものとして評価した。しかし，初期開化派のそういう調和的姿勢は「不徹底的な近代認識に起因しているのではないか」という疑問が残され，日本の文明開化論及び福沢の啓蒙教育論との比較研究の必要性を感じたのである。
- (4) 兪吉濬の日本留学の経緯を検討する研究は李光麟「開化初期韓国人の日本留学」(『韓国開化史の諸問題』，一潮閣，1986)，朴己煥「近代初期韓国人の日本留学」(『日本学報』40，1998)などがある。朴己煥の研究には当時私立学校の学籍簿を調査して留学生をより正確に把握し，留学生の生活像も紹介している面から参考になる。ただ，それは兪吉濬研究ではないということから，兪吉濬の留学の全体像は把握できない。阿部洋「旧韓末の日本留学—資料的考察(Ⅰ)」，『韓』3-5，1974にも兪吉濬の記事が紹介された。
- (5) 韓国において，兪吉濬研究は歴史・政治学・教育学分野において行われ，開化派の人物のなかでは研究が進んでいる方である。代表的な研究を取り上げて見ると次のようである。李光麟「美国留学時節の兪吉濬」(『新東亜』，1968，2，『改訂版韓国開化史研究』一潮閣，1974)，金泳鏞「兪吉濬の開化思想」(『創作と批評』，1968，秋号)，姜万吉「兪吉濬の韓半島中立化論」(『創作と批評』1973，冬号，『分断時代の歴史認識』創作と批評社，1978)，全鳳徳「西遊見聞と兪吉濬の法律思想」(『学術院論文集』15，1976，『韓国近代法思想史』博英社，1981)，李光麟「兪吉濬の開化思想—西遊見聞を中心として」(『歴史学報』75，76合集，1977)，李光麟「日本亡命時節の兪吉濬」(『新東亜』10月号，1986，『開化派と開化思想研究』一潮閣，1989)，柳永益「甲午更張以前の兪吉濬—1984年親日改革派としての登場背景を中心に」(『翰林大学論文集』4，人文・社会科学編，1986，『甲午更張研究』一潮閣，1990)，柳永益「甲午更張推進勢力の思想と行動—甲午改革と官僚の背景と改革構想を中心に」(『翰林大論文集』5，人文・社会科学編，1987)，具仙姫「福沢諭吉と1880年代韓国開化運動」(『史叢』，32，1987)，李光麟「兪吉濬の英文書翰」(『東亜研究』14，1988，『開化派と開化思想研究』一潮閣，1989)，盧武志「矩堂 兪吉濬の民族的啓蒙運動に対する考察」(『社会科学論集』4，1988)，金鳳烈「兪吉濬の開化思想研究」(慶熙大 博士学位論文，1989)，柳永益「西遊見聞論」(『韓国史市民講座』7，一潮閣，1990)，尹炳喜「大韓帝国末期兪吉濬の思想と活動」(西江大学校 大学院 博士学位論文，1992，『兪吉濬研究』，国学資料院，1998)，李元栄「開化思想の構造的分析」(梨花女子大学校大学院博士学位論文，1994)，李起勇「韓国開化思想と日本文明思想の比較研究—兪吉濬と福沢諭吉を中心に」(『韓日関係史研究』4，1995)，鄭容和「兪吉濬の政治思想，伝統から近代への複合的移行」(ソウル大学校博士論文，1998)。
- (6) 柳永益の意見であるが，基本的には李光麟の立場とも共通点がある。
- (7) 全鳳徳，姜在彦，李元栄などの研究がそれにあたる。
- (8) 韓国近現代社会研究会「韓国近代開化思想と開化運動」(シン書院，1988)。
- (9) 鄭容和(1998)から見えるが，実は，拙稿，(1998)も基本的に同じ発想から研究されたものである。李起勇(1995)の研究にも基本的発想の類似点が見える。
- (10) 日本における兪吉濬研究は魯在化「福沢諭吉と兪吉濬の開化教育に関する比較考察」(『一橋研究』12，1988)，月脚達彦「開化思想の形成と展開—兪吉濬の

- 対外観を中心に」(『朝鮮史研究会論文集』28, 1991), 金泰俊「外国への憧憬と祖国への回帰—兪吉濬の『西遊見聞』, 福沢諭吉の『西洋事情』との関連を中心に」(『比較文学研究』(東京女子大学), 1996), 金鳳珍「近代」における東アジア知識人の国際政治観—鄭觀応・福沢諭吉・兪吉濬の比較考察」(『北九州大学外国語学部紀要』87, 1996) などがある。兪吉濬を中心としている論文ではないが, 兪吉濬に触れている研究としては, 青木功一「朝鮮開化思想と福沢諭吉の著作」(『朝鮮学報』82, 1969), 姜在彦「開化派における自由民権思想の形成」(『近代朝鮮の改革思想』日本評論社, 1973), 趙景達「朝鮮における大國主義と小國主義の相克—初期開化派の思想」(『朝鮮史研究会論文集』22, 1985), 任展慧「日本における朝鮮人の文学の歴史—1945年まで」(法政大学出版局, 1994), 原田環「朝鮮の開国と近代化」(溪水社, 1997), 稲葉継雄「旧韓国の教育と日本人」(九州大学出版会, 1994), 月脚達彦「近代朝鮮の改革と自己認識・他者認識」(『歴史評論』614, 2000) などがある。
- (11) 朴贊勝「韓末自強運動論の各系列とその性格」(『韓国史研究』68, 1990) 参考。
- (12) 「光復策」(『兪吉濬全書』IV, 一潮閣, 1971) p.267. 以下『全書』とする。
- (13) 「與福澤諭吉書」『全書』IV, p.277.
- (14) 鄭容和の場合も兪吉濬の日本観, また, 日本を当時の知識人には改革のモデルとしての開化の支援勢力として把握したが, 帝國主義的侵略性を知らなかったわけではないと指摘している。(『震檀学報』89, 2000, p.340, シンポジウム:『西遊見聞』の総合的検討の討議の答えから) 一方, 金鳳珍(1996)は1907年以後日本に対する積極的抵抗運動より啓蒙教育活動に献身しながら日本との妥協を唱えたのは帝國主義勢力の日本とではなく, 日本の「信義」との妥協であったと理解した。
- (15) 丸山は脱亜論以前の福沢は「欧米列強の東洋侵略に対する日清韓三国の独立を共に確保させようとした」と, また「日本及び欧米列強との間の不平等条約を受け容れさせながら, 「近代」的な国際関係のもとで朝鮮の独立をはからせようとするもの」と主張した。一方, 安川は「福沢は帝國主義的論理を積極的に受け入れて, 「文明」の名において日本の「脱亜」を肯定しアジア諸国に対する帝國主義的侵略と併合の道をさしめした」と主張した。福沢の脱亜論の研究は丸山真男氏の「福沢諭吉選集」第四巻の「解題」, 1952, 今永清二「福沢諭吉脱亜論—近代日本における脱亜の形成についての試論」(『アジア経済』16-8, 1975), 青木功一「脱亜論の源流—時事新報創刊年に至る福沢諭吉のアジア観と欧米」(『新聞研究所年報』(慶応義塾大学新聞研究所) 10, 1978), 西尾陽太郎「福沢諭吉脱亜論成立の周辺」(『西南学院大学文理論集』20, 1979), 細野浩二「東洋盟主論の隘路と脱亜論の理路—西欧列強と清朝中国のあいだ」(『社会科学討論』(早稲田大学)27-1, 1981), 坂野潤治「解題」(『福沢諭吉選集』第七巻, 1981), 赤野孝次「福沢諭吉の朝鮮文明化論と脱亜論」(『史苑』56-1, 1995), 最近の研究として安川寿之輔「福沢諭吉のアジア認識」(高文研, 2000) がある。
- (16) 「福沢と朝鮮開化派との関わり」の研究においてその一人である兪吉濬との関係に触れている福沢研究もある。青木功一(1969)をはじめ, 福沢の「対朝鮮論」, 朝鮮開化派との関連研究からうかがえる「対朝鮮観」に対する主な研究は次のようである。今永清二「福沢諭吉のアジア観」(『史学論叢』(別府大)9, 1978), 青木功一「福沢諭吉の朝鮮論」(『横浜市立大学論叢』人文科学系列 32-1, 1981), 石板巖「朝鮮と福沢諭吉」(慶応大学出版会, 福沢記念選書44, 1988), 原田環(1997)などがある。
- (17) 韓国教育史分野では公教育や国民教育研究において兪吉濬の「西遊見聞」が資料として使われるが, 兪吉濬の研究としては呉成哲「兪吉濬の教育思想再考」(『清州教育大学校論文集』35, 1998) などがある。兪吉濬に触れる研究としては尹健次「朝鮮近代教育の思想と運動」(東京大学出版会, 1982), 拙稿(1998), 盧栄沢「韓末国民国家建設と国民教育」(シン書院, 2000) などがある。
- (18) 拙稿(1998), 注(3) 参考。
- (19) 兪東濬「兪吉濬伝」(一潮閣, 1993) p. 5.
- (20) 18世紀後半に朴趾源と朴齊家などにおいて「北学」とは一次的には「正徳, 利用, 厚生之具」をはじめ瀕に残っていた「中華の残つてある制度」を学ぶという意味であった。しかしそれは当時朝鮮の思想界の反清的な北伐大義論と「朝鮮が中華」という文化自尊意識を受けるかぎり不可能なことであった。従って老論核心階層で成長した一部知識層が北学をしようとするため前提的論理として北学論を提起したのであった。(兪奉学「18-19世紀燕巖派北学思想研究」(ソウル大学校 博士学位論文), 1992, pp. 6-7).
- (21) 李光麟「韓国開化思想研究」(一潮閣, 1993) pp. 31-57.

- (22) 「矩堂詩鈔」【全書】V, p.161.「兪矩堂吏部少有
 偶才, 自髮訛時出語不俗, 朴齋先生覺見其詩知其為
 國器, 大加獎勸然深海國函誌, 曰此時外洋事不可不
 知也」
- (23) 「朴珪寿全集」上, (亜細亜文化社, 1978, p.
 558).「称礼義之邦, 此説吾本陋之, 天下万古安有為
 國, 而無礼義者哉, 是不過中国人嘉其夷狄中乃有此
 而嘉賞之, 曰礼義之邦也, 此本可差可恥之語也, 不
 足自豪於天下也」.
- (24) 「朴珪寿全集」上, pp. 263-267.
- (25) 金道泰『徐載弼博士自叙伝』(乙酉文化社, 1972),
 pp. 82-85.
- (26) 李光麟『開化党研究』(一朝閣, 1993), pp.1-66.
- (27) 李光洙「朴永孝氏からの物語」(『東光』, 1931, 亜
 世亜文化社影印本), p.15.
- (28) 李光麟「『易言』と韓国の開化思想」(『韓国開化
 史研究』一朝閣, 1993), pp.22-23.
- (29) 井上角五郎は「福沢先生の朝鮮経営と現代朝鮮の
 文化について」, (『日韓末帝侵略資料叢書VII』, ソ
 ウル亜世亜文化社 収録本参考), p.292. 朝鮮開化
 派に対する福沢の指導説は山辺健太郎の『日韓併合
 小史』(太平出版社, 1961) で提議されたが, 最近で
 は, 日本の研究においても, 稲葉継雄(1994), 月脚
 達彦(1991, 2000) など「開化派の自主的形成と福沢
 の支援」の説の上で研究が為されている.
- (30) 鄭玉子, 紳士遊覽団考, 『歴史学報』27, 1965と李光
 麟(1977) 参考.
- (31) 「福沢論吉伝」第三卷, pp.287-288.
- (32) 「慶応義塾五十年史」, 1901, pp.538-540.
- (33) 「新聞集成明治編年史」第四卷, p.381.1882(明治
 十五年) 9月2日の『時事新報』では「朝鮮開化党
 の親王金玉均全貌」で, 「福沢論吉伝」とほぼ同じ内
 容が紹介されている. 『新聞集成明治編年史』第五卷,
 pp.147-148.
- (34) 「福沢論吉伝」第三卷, p. 289.
- (35) 金鳳珍はこの連携に対する福沢の関心を「条件付
 きの暫定的提携論」とする. 甲申政変の以後には福
 沢の国際論は「時事小言」の主張に戻ったという見
 解もある. 「朝鮮の開化初期新聞に関する一考察」, 『北
 九州大学外国語学部紀要』(86号), 1995, p.53.
- (36) 「新聞集成明治編年史」第四卷, p.401.
- (37) 鎌田榮吉「義塾と朝鮮との関係」(『三田評論』四
 月号, 1918) pp. 7-9. この資料は朴己煥(1998)の研
 究ではじめて紹介された.
- (38) 李光麟(1977) 参考.
- (39) 興亜会の出席の記事は1882(明治十五年) 年6月23
 日, 『東京日日新聞』(『新聞集成明治編年史』第五卷,
 pp. 95-96) にみえる. 兵の要請の様子は彭沢周『明
 治初期日韓清関係の研究』(東京: 境書房, 1969) 参
 考.
- (40) 「福沢論吉伝」第三卷, p.298.
- (41) 兪東濬(1993), pp.75-76.
- (42) 「全書」V, p.279.
- (43) 「福沢論吉全集」第十五卷, pp. 367-371.
- (44) 李光麟「兪吉濬の英文書翰」(1989), p. 220, pp.
 237-240.

A Study on Yu Kil-chun's Academic Activities in Japan

Eunsong Lee

This research explores the significance of Yu Kil-chun's academic activities in Japan during 1881 and 1882. Yu kil-chun was a member of Korean enlightenment group, and the first Korean student who was sent to Japan with Korean governmental scholarship. So it is possible that his pursuit of new knowledge in Japan gave significant effect on the connection between Korean enlightenment group and Japanese intellectuals. This research focuses on the relations between Yu Kil-chun, the member of the Korean enlightenment group and Fukuzawa Yukichi, the most famous Japanese intellectual figure.

Assessments of Yu Kil-chun in studies so far are controversial. One is the ideal and patriotic reformer, and the other is negatively the pro-Japan bureaucrat. This research argues following three topics to support former perspective.

First, Yu kil-chun's studying in Japan was indebted to Fukuzawa Yukichi's supports and other Korean enlightenment group members' activeness in Japan.

Second, Fukuzawa Yukichi successfully obtained Yu Kil-chun's trust and Yu Kil-chun became to believe in Japan in that procedure as the supporter of Korean independence rather than the aggressive imperialist.

Third, Yu Kil-chun's diplomatic idea of the tripod solidarity of Korea, China and Japan was generated during the studying period in Japan.